

ボランティアの社会学 序論

(旧題：ボランティア活動に対する社会的アプローチを目指して)

豊島 慎一郎

世の中には、一人ひとりが何とかしたいと思っけていても、なかなか解決できない問題が多い。例えば、貧困、差別、戦争など... 誰もが早くなくなればいいのに、と考えている問題がある。世界的規模で重く苦しい話でなくとも、「困っている人を助けたい」、「自分の力を世のため人のために役立てたい」という気持ちは、道徳一般の考え方と結びついて私たちの心のなかに少なからず存在している。私自身もそのような思いをもって、大学一年生の頃から約10年間、ボランティアで障害をもった人たちの身辺介助をしたり、芦屋の高校の先生と一緒に西宮市の被差別部落に住む中高生に勉強を教えていたりした。その意味では、ボランティア活動は、「困っている人を助けたい」、「自分の力を世のため人のために役立てたい」という人の思いをストレートに実現できる行動だと言える。以下、私の経験を踏まえながら、私たちの社会のなかでボランティア活動がどのような形で位置づけられているかについて簡単に触れていくことにしよう。

一般的に、ボランティア活動は自己犠牲的、愛他的な行動として理解され、好意的に受け止められる傾向がある。その反面、「他人のために自分の生活を犠牲にする」というイメージから「変わり者」、「偽善者」、「マジメでクワイヤツ」扱いされるケースが多々ある。また、ボランティア活動は、昔から一部の篤志家や慈善家といった人たちによる「エリート的な」活動としてみられてきた。私自身は、当時は一介の学生にすぎなかったが（周りからは「変なヤツ」扱いはされていたけれども）、普通に働いている人たちに比べて時間的な余裕が多く、実家通いでバイトにも精を出していたため経済的に不自由がなかったこともあって、さほど難なく活動を続けることができたのだと思う。

では、周りの人たちの反応はどうであったか。大半の人たちからは「君はエライねえ。私はエライくないからボランティアなんてとてもできない」といったようなことをよく言われた。このコトバは、ホメ言葉のように聞こえるが、実は「私とは無関係な別世界の人間」としてボランティアを捉えていることを意味している。だから、「ホントにエライと思っているんだったら、口だけでなく一度はボランティア活動をやってみれば？」とよく心の中でツッコミをいれたものだ。その一方、一部の人たちからは「自分ひとりの力でメシすら食えないヤツが人助けなどよくやれるものだ」とか「ボランティアなんかしてしんどくない？ホントに楽しい？」といったようなことをよく言われた。私の経験上、そんなことを言う人間に限って、今まで全くボランティア活動などしたことない場合が圧倒的に多い。だから、「アンタラに言われる筋合いはないわい！」と心のなかでツッコミをいれたりしたが、そんな思い切ったコトをなかなか口に出せないのも、ボランティアの特徴なのかもしれない。

このような思いをしていたのは私だけかと思っけていたら、そうでもなかった。金子郁容『ボランティア もうひとつの情報社会』（岩波新書）を読んでみると、こうした周りの人たちの反応はボランティア活動をしている人たちにあてはまる一般的な傾向であることがわかる。このような傾向が現われるのは、ボランティア活動を「無償で自発的な人助け」という昔からの根強いイメージで捉えていることに原因があるのではないだろうか。

まず、「ボランティア活動は無償」だという考え方は、簡単に言えば自分が人を助けるという行いに対して「見返り」を求めてはならないということである。しかしながら、「見返り」とは、お礼としてカネ

やモノによってなされるような側面だけではない。自らの意志で人を助けたコトが、助けた相手だけでなく周りの人たちに認められたり、賞賛されたりすることによって自分の考え方や行ないに自信をもったり、人が助かった様子をみて心が充たされることも「見返り」だと言える。それが、ボランティアにとっての「幸福感」や「生きがい」につながることもある。

次に、「ボランティア活動は自発的な人助け」だという考え方は、「助ける側」の視点を中心に置いた捉え方である。ボランティア活動は当然、ボランティアそのものの存在が必要だが、他者との関係性やコミュニケーションが必要不可欠である。ボランティアにとっての他者とは、1.活動を受けいれて活用する人たち、2.同じ思いをもって共に活動を行なっている人たち、そして3.活動を支える身近の人たち、という少なくとも三つの関係が存在する。私のばあい、1は「障害をもった人びとや被差別部落に住む中高生」、2は「ボランティア仲間」、そして3は「私の学生生活を全面的に支えてくれている家族や周りの友達」が当てはまる。これらの人たちがボランティア活動の内容そのもの（意義）だけでなく、私自身の生き方や生活のあり方について理解し、支えてくれたからこそ、約10年もの間、私はボランティア活動を続けることができたのだと思う。このような視点に立ったとき、ボランティア活動とは「助ける側と助けられる側という関係」のみによって成り立っているのではなく、「誰かの助けを必要とする問題」をお互いに協力しながら解決しようとする「人と人との関わり」によって成り立っていることが理解できよう。

現在、私は、こうした経験がきっかけとなって社会学研究者として「ボランティア」をテーマにして研究活動を行なっている。最近では、「1995年社会階層と社会移動全国調査（SSM調査）」のデータに用いて、現代日本におけるボランティア活動の現状を記述し、活動への参加を促す要因について分析と考察を行なった。得られた結果の一つとして、ボランティア活動への参加は、自分自身の生活や人生を充実させることを重視するライフスタイル（生活様式）をもつことによって促進される傾向があることが明らかになった。この結果は、ボランティア活動が「無償で自発的な人助け」ではなく、自分の意志で自分の生き方を積極的に切り開いていこうとする行動であることを示唆している。以上のことから、ボランティア活動とは、「自らの意志で積極的に他者、社会に対して関わりをもつことを通して、自分自身の生き方や生活を選択、決定する営み」であり、私たちが生きていくなかで「自分が人と人との関係のなかで生きていくこと」を実感できる行動である、と理解することができよう。

「一人ひとりが何とかしたいと思っても、なかなか解決できない問題」のなかには、自分ひとりではなかなか関わるることができないが、みんながお互いにそれぞれの生き方や生活を大切にすることを基本にして、お互いに協力しあいながら積極的に働きかけることができれば、早く解決できる問題もあるかもしれない。このように、誰もが身近な生活の中で問題解決のための営みに参加できるようにするには、どのような方策（社会政策）が考えられるか、そしてどのような社会のあり方（社会制度）が望ましいか、という問いについて一つの解答を提示しようと試みるところに、社会学においてボランティア活動を研究対象として取り扱う意味がある、と私は考えている。